

地域格差と長欠（長期欠席）・不登校
—大阪府北河内地域をめぐって—

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター

本論文では「長欠・不登校」を、地域という視点から分析し考察していく。

毎年夏に文部科学省が長欠者と不登校者数について発表している。慣例の如くマスコミは不登校と不登校者数について論じるが、長欠と長欠者数(20 数万人程度。不登校者数 + 10 万程度)について論じることは全くない。

学校基本調査の統計を分析すると、不登校者数は、その時の文部科学省、都道府県や地方の教育委員会の方針によって、不登校ではなく病気やその他として「長欠」に組み入れられたりして、数の増減がある。不登校や長欠という概念は恣意的であるので、数の操作が可能である。また学校関係者に、不登校は不名誉なことだという意識も影響しているだろう。今、全国各地の教育委員会は、不登校生数を減らすために数値目標をかかげて取り組んでいる。数を減らすことにことだわると、不登校が長欠に組み入れられる可能性があるだろう。不登校を分析する時は、長欠を含めて分析していく必要がある。

教育問題について色んな立場の人がマスコミや書籍で論じている。的を射たものもあるが、時には勝手な思い込みで論じられ、社会に偏見を撒き散らすことさえもある。不登校についても同様なことがいえるだろう。

精神科医、スクールカウンセラーが分析する不登校や、マスコミ、書籍でとりあげられる不登校は、心の問題が基調になっている。多くの人の不登校についての認識に、それが深く影響している。心の問題は、不登校の要因の一部でしかない。不登校が心の問題として認識されている限り、不登校は個人の問題だという思考で停止する。人は社会的な存在である。多面的(家庭、学校、地域社会、経済など)に分析すると違った要因も浮かび上がってくる。今日の日本では、多くの人の生活が表面的には同質化しているように見えるが、実際には種々の社会・経済面で不平等化が進行している。

不登校者から不登校になった経緯を聴いて分析すれば、心の問題以外の問題が浮かび上がってくるだろう。しかし、個人的能力や時間的制約で不登校生への聴き取り調査は出来ないので、本論文では統計を利用して不登校に至る要因を分析していく。

大阪府の学校基本調査の統計だけでは不十分なので、情報公開で得た統計で不登校者数と不登校の要因を分析すると、地域の特徴が見えてくる。学校関係の統計だけでは一面的な分析になるので、地域の生活に関係ある統計と重ね合わせて不登校の要因を分析していく。

教師と保護者だけで不登校に対応することには限界がある。地域の実態をふまえて専門家と協同で対応すれば不登校の子ども達の進路が開けてくるだろう。